

# 巻頭言

## 「中難協と全難聴の会員増加を考える」

理事長 新谷 友良

6月9日、全難聴（正式には一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会と言います。）の通常総会が開催され、2020年6月まで2年間全難聴理事長を続けることになりました。皆さま、どうぞよろしくお祈いします。

全難聴は個人が加盟する団体ではなく、全国各地の中途失聴・難聴者の団体を会員とする全国組織で、現在55の協会が正会員として加盟しています。今回の通常総会では役員選挙があり、理事19名、監事2名が選出されました。全難聴はこの理事会を中心に活動していて、その下に八つの事業専門部、三つの年齢階層別専門部が設けられており、協会の組織形態と非常によく似ています。

全難聴は全国レベルの組織ですので、理事会・専門部を通じて中途失聴・難聴者の全国的な課題解決に向けて活動することになりますが、一方全国各地の難聴者組織の連合体であるところから、地域の課題にどのように対応するか、地域課題と全国レベルの課題への取り組みのバランスが問題になります。このような点も、区市町村の課題と都レベルの課題へのバランスが求められる協会と大変よく似ています。

現在、障害者団体は、どこも会員の減少に直面しています。一定程度の福祉の向上があり、さまざまな分野での障害者の社会参加が進んでいます。障害を持った人も、障害を持たない人との多様なコミュニティでの交流にやりがい・生きがいを感じる流れが強まっているように感じます。

障害者団体が、仲間同士の交流・助け合いの場であり、そのような場を作り、維持していくことが障害者団体の役割であることは間違いありません。また、一方では協会の定款にあるように「福祉の増進と、生活・文化の向上を図る事業を行い、地域社会に寄与する」ことも障害者団体の大切な役割になっています。社会にある多様なコミュニティで障害者が欠かせないメンバーとして活動するためには、自分自身の障害をどのように参加するコミュニティで表現していくかが問われると思います。障害者団体と社会にあるさまざまなコミュニティとの交流を、障害を軸に実現していく、その担い手を誰に求めるかを考えることで障害者団体の役割や会員増加へのヒントが見つかるような気がします。